

医療と介護の連携を実現 安心や信頼が存在価値に



開業4年後に有床診に転換 人件費が経営を圧迫

1997年に二宮内科を開業した二宮正則院長は、開業4年後にあえて有床診療所(19床)に転換した。当時、周囲からは「わざわざベッドを入れるとは理解できない」とまで言われたそうだ。だが、二宮院長は慢性期の患者や、受け入れ先に困っている認知症患者の受け皿として、病床は不可欠なものと判断した。

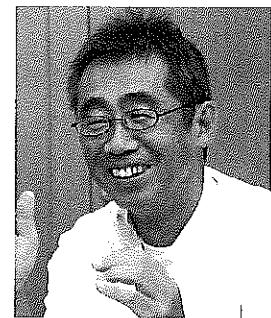
同院は内科・循環器科・消化器



外来は1日に約300人。処置室には14のベッドが並ぶ

科・放射線科・麻酔科を標榜するほか、院内にデイケアセンターがある。二宮院長が理事長を務める医療法人社団恵正会には4つの診療所と訪問看護ステーション、ヘルパーステーションを運営、関連施設として特別養護老人ホームと有料老人ホームを手がけ、「地域との密着」、「医療と介護の連携」の理念を実現している。

同院のベッドは特養や有料老人ホームの入居者が急変した際の受け入れ先として、また、法人で受けもつ在宅患者のバックベッドとして機能し、地域の病院の慢性期患者も受け入れている。有床診に転換後はほぼ満床の状態が続いているが、それでも経営は厳しい。



「入院機能で患者さんに安心感を届けたい」と話す二宮正則院長

「入院部門は赤字です。それは覚悟していた、というより、黒字にしようというつもりは最初からありませんでした」と二宮院長。不採算の主な理由は人件費。看護師11人に加え、介護職員は常勤7人を含む計12人と充実。PT・OT・STはデイケアセンターを兼務しているものの5人を配置している。同院では患者が寝たきりにならないように手厚い看護をしており、どうしても人員が増えちゃうという。

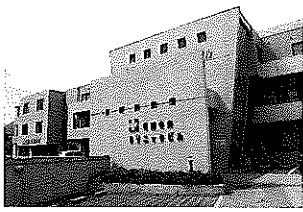
関連施設の収益で赤字を補填 患者のメリットを重視

同院の赤字は年間で約3000万円にも及ぶが、関連施設などの収益で補い、法人としては黒字化を実現している。「ベッドをなくせば経営はもつと安定するだろう、と思われるかもしれませんが、そ

んなに単純なものではありません。地域の受け皿としての機能、患者さんやその家族との信頼感や安心感があつてこそ、クリニックの存在価値があると考えています」と、今後もベッドの削減や無床化は考えていない。

「もし当院を黒字にできるとすれば、何かに特化した治療を提供し、技術料で診療報酬を上げる以外には不可能でしょう。現在の点数制では、どんなに頑張っても赤字を1000万円に減らすのが限界だと思っています。かといって、特別にそのための工夫も努力もしていませんけど」と、二宮院長は笑いながら話す。

赤字を減らす努力よりも、患者のメリットを考えた医療を提供することに労力を費やしたほうが、結果的には得策かということかもしれない。(写真・文 川田段武)



DATA

広島市安佐北区可部5-14-16
TEL: 082-810-0188
URL: <http://www.keiseikai-nmn.net/>
診療科目: 内科、循環器科、消化器科、放射線科、麻酔科